

2024 年度

青山学院大学審査学位論文の要約

指導教授 小松 靖彦 教授

日本タゴール翻訳史

A History of the Translation of Rabindranath Tagore's Works in Japan

文学研究科

日本文学・日本語専攻

新田 杏奈

【題目】

日本タゴール翻訳史

【要約】

本申請論文は、近代インドの詩人として知られるラビンドラナート・タゴール (রবীন্দ্রনাথ ঠাকুর, Rabindranath Tagore, 1861~1941) の「日本人翻訳者」の系譜に着目し、大正初期から戦後に至る翻訳の歩みを、翻訳史として体系化したものである。その成果として、明らかにされたのは西欧文明に対する危機感を背景として、タゴールが繰り返し受容されてきたという事実である。論者は、最終的に日本におけるタゴールの翻訳ブームは二度あったと結論づけた。一度目は、「タゴール初来日」を契機とした第一次世界大戦下、西欧文明崩壊の危機感の中で、「欧州文明の救世主」としての役割を期待され、その作品が広く日本人に読まれた。二度目は、戦後の価値観を体現するアメリカとソ連の冷戦下、核の脅威が俄かに高まる中、「タゴール生誕百周年」をきっかけとして、タゴールが再評価されるに至る。また、タゴールのリバイバルが六〇年安保闘争時期に重なることも見逃せない。タゴールは、「反欧米」ないし、「疑欧米」の社会的ムーブメントを背景に、常に「東洋」（非西、欧米を除く地域全てを含む抽象的概念）の象徴として受容されてきた構造が明らかとなった。

一方で、こうした流れとは異なる動きもあった。死の淵でタゴールの作品に救いを求めた増野三良、故郷〈高知の海〉とタゴールの詩に深い繋がりを感じた片山敏彦などは、その代表として挙げることのできる翻訳者である。本論は、大きな社会的な流れを踏まえながらも、翻訳者個人の受容に焦点を当てることで、日本における多層的なタゴール受容のあり方を示した。本論は第一章から第四章を〈第一部 大正期〉、第五章から八章を〈第二部 昭和期〉とし、大きく二部構成とした。各章の概要は以下の通りである。

第一章では、日本で集中的にタゴールの作品が翻訳された大正四年(一九一五)前後を対象に、最初期の移入過程と翻訳の特徴を分析した。また、〈大正詩壇〉と〈自由基督教〉という二つの観点から、各々その中核を為す詩雑誌『未来』とキリスト教総合雑誌『六合雑誌』の中身を検討した。この上で、「なぜ大正初期という時代においてタゴールが受容されたのか」という問題に対し、前者には「大正生命主義の潮流」、後者には「自由宗教としての親和性」、「第一次世界大戦の影響」などの要因があったことを明らかにした。

第二章では、日本で最も早くタゴール作品を翻訳した英文学者詩人の増野三良を取り挙げて論じた。そして、その最初の出会いがロンドン発行の新聞 *The Nation* に掲載された英詩であったことや、彼が「ノーベル文学賞」受賞以前からタゴールの価値を見出していたことを新たに指摘した。更に、増野がタゴール作品に傾倒した要因について考察し、彼がタゴールという存在によって「ヒューマニズム」という新たな思想的転換点を迎えたことや、結核を患い自らの死と向き合う日々の中で、増野自身がタゴールの作品に救われていたことを

明らかにした。

第三章では、『六合雑誌』の編集委員を務める傍ら、タゴールの研究に熱心に取り組んだ作家の吉田絃二郎に焦点を当て論じた。従来、タゴール研究の側から、絃二郎のタゴールに対する視線は、「啓蒙的」で「帝國的」であると批判されてきた。しかし、「そういった認識で良いのか」という疑問を立て、先行研究が見落としてきたと思われる絃二郎の文学的立場に注目して、絃二郎の思想とタゴールの共鳴関係を再度検討した。特に、本章ではタゴールに関する絃二郎の言及の全貌を整理し、絃二郎が「自然主義のアンチテーゼ」としてタゴールを受容した事実を指摘した。最後に、その背景として絃二郎が、自然主義を通過した文学者としての懐疑的視線を有しており、それが彼のタゴール観を形成する上で、最も大きな影響を及ぼしたという結論を出した。

第四章では、タゴールの長編小説『ゴーラ』の最初の翻訳者でありながら、柔術指導者兼日本語教師としてタゴールの学園に招かれた佐野甚之助に焦点を当てた。本章では、川口蕙海、福沢諭吉の推薦でインドに渡った佐野が、帰国後長編小説『ゴーラ』の翻訳に至るまでの経緯を論じた。更に、佐野訳『ゴーラ』の特色を、「英訳本介入」、「渡印経験に基づいた解説」、「不思議の鳥」の韻文訳」の三つの視点から分析した。佐野訳の真意は、「タゴールの人生観と思想の真意」を日本の読書界に伝えることであったが、その紹介が大正初期の「タゴール・ブーム」時には、「新しいものではない」と冷ややかだった日本の仏教界が、タゴールに対する味方を変える一因となっていたことも指摘した。

第五章では、日本でタゴールが遠ざけられたとされる要因について、第一に「亡国の詩人」という問題、第二に「野口・タゴール書簡論争」という観点から先行する議論を整理した。この上で、昭和期における翻訳書の全体像を概観し、昭和期に入って巻き起こった「円本ブーム」の影響を指摘した。更に、山本有三が編纂した『日本少国民文庫』に焦点を当て、時勢を超えたヒューマニズムの観点から、タゴールの児童詩が戦前の日本の子供たちに紹介されていた事実を明らかにした。更に、これまで議論の射程に入らなかった戦後のタゴール再評価にも注目する。日本は、西洋文明の危機を、「第三者」という立場で目撃した時、タゴールの「東洋の叡智」に期待し、評価するという構造を繰り返してきた。本章では大正初期の「タゴール・ブーム」と戦後の「第二次タゴール・ブーム」の類似性を指摘することで、日本におけるタゴール受容の問題点を明らかにした。

第六章では、これまで見落とされていた片山敏彦のタゴール受容に光を当てることで、従来タゴール研究の側から明らかにされることのなかった戦前と戦後の受容に関する連続性の論証を試みた。まず、片山が「タゴールの作品にいつ出会い、どのように惹きつけられていったのか」という問題を考察し、更に片山の欧州遊学におけるタゴールとの接点を、「ロマン・ロランとの面会」、及び「タゴールの個展訪問」という二つの事実から追及した。最後に、戦時下の片山のタゴール読書を支えた彼の故郷、土佐の風土が内包する特殊性にも触れ、戦前の決意から戦後の翻訳までの流れを辿ることで、片山のタゴール受容の全貌を明らかにした。

第七章では、戦後民主主義を担う少年少女のためにタゴールの児童文学を多数紹介し、戦後のタゴール受容の基盤を作った山室静のタゴール受容に含まれる問題点とその原因を追究した。具体的には、戦後の山室がタゴールの作品を積極的に受容したのは、ヒューマニズムの狭さと醜いエゴイズムを超克するためであったにも関わらず、実際の翻訳にあたっては、そのヒューマニズムの枠組みから、一部のタゴールの児童文学作品を批判して紹介しなかったのはなぜなのかという問題を考えた。その原因として、マルクス主義からの転向後、山室の頭の中で、脱却したはずの「自我思想」と「進歩主義」などの西欧の思想が、戦後もなお影響力を保持していたこと、それが戦後の山室のタゴール評価、および紹介のあり方に強い影響を与えていたという事実を明らかにした。

第八章では、日本で最も早くタゴールのベンガル語詩を翻訳したことで知られる仏教学者の渡辺照宏に注目し、第二次タゴール・ブーム下において渡辺が果たした先駆的な役割を論じた。また、同名二つの詩集『ギタンジャリ』（ベンガル語本と英語本）の間に感じたギャップが、渡辺の翻訳の原点であったことを明らかにした上で、渡辺が主張するタゴールの英訳に潜む問題点を、「表現の問題」と「編纂の問題」という二つの角度から整理した。更に、ベンガル語原詩の韻律美を日本人に紹介しようと努めた結果、最終的に『万葉集』に回帰してしまった渡辺の日本語訳は、渡辺が批判した「白人向け」にヴィクトリア朝の擬古文を用いた、タゴールの英訳と本質的に同じ問題を抱えていることを明らかにした。

最後に補論では、「タゴール自身が日本と日本の文学をどのように見たのか」について、新たな角度で捉え直した。まず、タゴールの日本論として、最も有名な『日本旅行者』

(জাপান যাত্রী, *Japan Jatri*, 1919) を、先行して出版された武田ホリプロバの『あるベンガル婦人の日本旅行記』(বঙ্গমহিলার জাপান যাত্রী, *Bangamahilar Japan Jatra*, 1915) と見比べ、両書の間にもみられる連続性を論じた。また、タゴールの日本文学論として知られる『日本旅行者』の俳句論の背景に、大正三年（一九一四）の英国講演を元にした野口米次郎の *The Spirit of Japanese Poetry* (1914) の影響があった可能性を、タゴールに宛てた野口の書簡を紐解きながら論じた。また、タゴールの短詩を検証しながら、タゴールの詩作に対する野口の論の影響についても考察を試みた。最後に、今後射程に入れるべきこととして、「東アジア」という視点の重要性に関しても論じた。

以上